

東北大

きょうかん

発行
東北大学教育学部
関東地区同窓会
事務局
〒331-0043
さいたま市大成町1-558
モンシェール大成206
(中川典雄方)
電話 048-667-7998
編集 企画・広報委員会

新しい交流チャンスの提案

会長 家根敏明



関東地区の学部同窓会は発足十三年を迎えましたが、今日に至る会の発展に努力を尽くされた先人の方々から敬意を表したいと存じます。同窓会の活動は常時専任の組織を持つわけではなく、関係幹事がその都度それぞれの日常時間を都合して検討課題を協議する方法なので、一つの結論のために予想外の時間がかかったり、進捗不良のもしかしい思いにかられることもあります。これはいわゆる事務的処理と称される取組とは異なり、人為的な作業を重ね、関係幹事の誠意と努力によって形成された結果であり、その結果が会の存立を支える背景となっていると申せましょう。

最近同窓会のネットワークによる交流が話題を呼んでいると聞きますが、昨今のような信頼欠如社会にあつては、人何か確信の持てる人間関係を求めたいという衝動に駆られるのでしょうか。同窓会がこうした感情交流の場として期待されるころがあるとするれば会の進路としても、今後目標とするべきひとつの方向と考えることができます。従来の名簿管理や会報編集に加えて、会員相互の新しい交流チャンス提案する活動や、各位の様々な提案提言による会員の常時参加型運営に質的転換をはかるなど社会的背景の変化に対応する情報交流、行動交流のあり方を検討してみる必要を感じま

す。勿論常時専任の組織を持たない会の宿命から、これらの課題解決が容易でないことは明らかですが、求むべき方向であることは確かなようです。

先に越河前会長の後任の要請を頂いた折、固く辞退の意向をお伝えしつつも、結局お引き受けすることとなったのは、すでに約五十年を数える昔日、片平丁キャンパスのゼミの研究室における信頼と友情に満ちた忘れがたい充実の日々が今も念頭を離れないからであります。藤井仙台市長も当時の体験共有を持つ先輩の一人であり、過日お目にかかる機会を得た際に来る十一月八日(金)の学部関東地区同窓会総会で先輩の立場からの記念講演を是非にとお願いしたところ、超多忙のスケジュールを割ってご出席いただけることになりました。この機会にただ多数の皆様は総会へのご参加を賜って仙台を語り、友情を語り、人生を語りつつ新しい会員交流の輪を拡大させて頂きますよう願ってやみません。

最後に学部発展に大いなる足跡を残された竹内利美、塚田毅面教授は残念にも昨年ご逝去されました。謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。

また当会活動に多大の貢献をされた岩坪奇子副会長が今夏急逝されました。悲しみと共に心から哀悼の意を捧げたいと存じます。

第7回東北大学教育学部関東地区同窓会総会のご案内

第7期同窓会を、特別講演には、仙台市長の藤井黎氏を講師に迎え、下記の通り総会を開催することになりました。是非共ご出席をお願い申し上げます。なお出欠のご回答を事務局あて同封のハガキにて10月21日(月)までにお寄せ下さい。

東北大学教育学部関東地区同窓会会長 家根敏明

記

- 開催日 平成14年11月8日(金) 18時30分より(18時受付開始)
- 会場 ホテルエドモント 2F「波光の間」

(詳細は7ページをご覧ください。)

教育学部の歴史的転換

—— 創立五〇周年を迎えて

東北大学教育学部 学部長 不破和彦



東北大学教育学部は、一九九九年五月に創立五〇周年を迎えました。このことを、教育学部の創設と発展に尽力されました教官、事務職員そして同窓生の皆様とともに、祝したいと思います。

『教育学部五〇年の歩み』は、創立五〇周年記念事業の一つとして刊行されるものです。教育学部は、戦後、新制の国立大学および学部設置を定めた国立学校設置法の施行により、東北大学の一部局として一九四九（昭和二十四）年に創設されました。本誌は、教育学部が半世紀にわたり日々刻んできた活動を年代記的に綴るとともに、東北大学および社会の時代的な諸状況との関連において、個々の活動がもつ歴史的な意味づけを、現時点で改めて試（こころみ）たものです。

「五〇」年という時間を凝縮した本誌はまた、創設以来、教育学部が教育の科学的な研究・教育および教育界で活躍する中核的な人材育成の専門組織として、一層の拡充と、総合大学である東北大学の自治と運営への責任ある参加に、それぞれ努めてきた営みをリアルに伝えるものです。もちろん、「五〇年の歩み」が平坦であったとは言えません。この過程において、教育

学部は組織の編成と運営のありかたをめぐり重大な決断を迫られる事態に、一度ならず遭遇しています。その中でも教員養成課程の分離・独立の問題は、教育学部五〇年の歴史において、大きな転換を画する一つでありました。

教育学部が、創設にあたり宮城師範学校と宮城青年師範学校とを併合し、教育の総合的な科学的研究とそれに依拠した教員養成という、当時としては斬新かつ理想的な構想を掲げ、実現に取り組んできたことを考えると、一九六五（昭和四〇）年の教員養成課程の分離・独立は、教育学部自らが組織としての新たな存在と方向性について、選択的な決定を行ったと言えます。その具体的な実相は、わが国において科学的な分析、方法を駆使した教育の研究教育の中核拠点化を積極的の指向し、附属大学教育開放センターの設置（一九七三、昭和四八年）、講座の新設など整備と拡充を遂げてきた、今日の教育学部に求められます。

しかしながら、教員養成課程の分離・独立に至る意思決定の過程は、学部教官による十分な審議とそれを踏まえた合意形成、さらに東北大学にとって大学自治の砦である最高意思決定機

関としての評議会との関係性をめぐって、学部自治の尊重と堅持に問題を残したと言わざるをえません。

現在、教育学部はまた、新たな歴史的転換を迎えています。大学改革の一貫として取り組んでいる学部の改革です。それは創立五〇周年を契機に、教育学部が今後に築いていく、新たな歴史の起点になるものです。一九九八（平成一〇）年四月に実施した学部の学科改組によって、それまでの教育学科、教育心理学の二学科、一五講座を、教育科学科の一学科、五大講座へと再編しました。

教育学部は、その前身を一九二二（大正一一）年に東北帝国大学法文学部哲学科の一講座として設置された、教育学講座に求めることができます。一九四九（昭和二四）年の独立した一部局としての発足以来、伝統ある教育の哲学的な研究教育を継承しながらも、社会学、行政学、心理学などの社会諸科学さらには医学などの理論や視点、方法の導入によって、広範な教育事象の実証的、実験的、臨床的な研究教育の推進に、いち早く着手してきました。この点に、戦後、類似の総合大学であった旧帝国大学に設置された、他の教育学部との対比において、本教育学部の特徴があるとともに、教育の研究教育の専門組織としての学部の創設と今後の発展に係わる、理念的な構想を見いだすことができます。そこからは、科学的な学問としての教育の研究が未確立の時代にあつて、科学的な方法による教育の総合的な研究教育

の創造とその具体的かつ組織的な活動の拠点化を、積極的を目指した意気込みが伝わってきます。こうした戦後間もない時期に描かれた、斬新かつ独創的な構想とその実現への学部を挙げての継続的な取り組みが、今日の教育学部の基盤を築き、その後の整備・拡充に道を切り開いてきたと言えます。その集大成の根幹にあたるのが、今回の学科改組前の講座編成でありました。

ちなみに、学科改組（一九九八年四月）前後の講座編成を含む学部の組織を記すと、以下の通りです。改組前は、二学科（教育学科、教育心理学科）体制で、教育学科は、教育哲学、教育史、教育思潮（以上が哲学専攻）、教育社会学、社会教育学（社会専攻）、教育行政学、学校管理、教育内容（行政専攻、スポーツ科学（スポーツ専攻）、教育心理学は、人格・学習心理学、児童・青年心理学、臨床心理学（心理専攻）、聴覚言語障害学、視覚障害学、知能障害学（障害専攻）の各講座から構成されていました。

改組後の現在は、教育学科の一学科制の下に、人間形成論講座（教育哲学、日本教育史、外国教育史、比較人間形成論各分野）、教育行政学、比較教育（教育社会学、教育行政学、比較教育システム論、教育計画論各分野）、成人継続教育論講座（成人教育論）、リカレント教育論、スポーツ文化論各分野）、教授学習科学講座（カリキュラム論、教育心理学、学習心理学、教育実践論各分野）、人間発達臨床科学講座（生涯発達心理学、臨床心理学、発

達臨床論、コミュニケーション障害学、発達障害学、障害補償論各分野)の五講座(大講座制)編成であります。

二一世紀を目前に、大学改革は世界的潮流といった様相を示しています。本格的に取り組まれてきているのに対して、日本の場合には比較的最近のこと

であります。大学改革が緊要な今日の課題として登場した背景には、現代社会が専門社会または知識社会として象徴的に語られるように、人間の知的活動によって創造的に生産された新たな

大きな役割を演じていることが挙げられます。これに伴い、現代社会は、知的生産の専門機関である大学に対し

て、研究教育の一層の質的な高度化と学際化、それを効率的・競争的に推進し、併せて研究教育の成果である知的

生産物の社会への積極的な提供を可能にする、新たな組織運営システムの確立を強く迫っています。この状況は教

育の研究教育の専門組織である教育学部についても例外ではありません。

今日、教育はかつて経験したことのない課題と憂慮すべき事態に直面しています。教育学部は、こうした状況を

わたり蓄積してきた個別分野ごとの研究の成果を基本的に継承しながらも、以前に増して、個別分野を横断した学

際のかつ総合的な研究を可能とする組織の構成を図り、教育の新たな研究分野

の開発と高度で先駆的、独創的な知の創造に努めることが、不可欠であります。

同時に、教育界はもろろんのこと、変動社会での生活、労働、余暇、福祉

など社会の広範な分野で活躍する専門的な教育指導者・援助者への社会的需

要の強まりに因應する、教育に関する深い見識と洞察力さらには課題解決に向

けて、高度な水準での実践的な企画・立案能力を備えた人材育成に鋭意取り組んでいくことが、教育学部の目標であります。

今回の学部の学科改組は、上記の研究教育の課題に因應するために実施されたものです。教育学部は一つの時代の存在に留まることなく、時代を超え

て、しかも発展的に維持・再生産されなければなりません。学部教授会はこの点を自覚しながら協議と合意形成を

踏まえ、学部の総力を挙げて遂行する責務をもっていると言えます。このこと

とは、教育学部が日本における教育の研究教育の中核機関として、常に時代の

教育の現在そして将来に向けての動向を視野に入れながら、研究教育の一

層の高度化と発展に不可欠な条件整備に不断に努める責務を負っていること

を意味します。

教育学部は、今回の学科改組を起点に、新たな歴史の構築に向けた一歩を

確かに踏み出したところです。その一

つ一つの歩みは、教育学部が今後に迎

「東北大学教育学部案内」にみる

教育学部の新しい専攻学科について

(1) 「教育学」は、つきない人間探求・実践力ある人材を育てます。

本学部では、「教育科学科」の一大

学科のもとで「教育」について総合的

かつ有機的に理解することを目指す教

育が行われます。この一大学科の下

に、次ページの図のような五つの講座

が組織されています。人間形成論講

座、教育政策科学講座、成人継続教育

論講座、教授学習科学講座、そして人

間発達臨床科学講座です。

これらの講座名称は、単一の学問領

域を表すものではありません。それぞ

れの講座が教育・研究の対象とする領

域を全体として総称するものであり、

学問としての系統を保持しつつ、「教

育」を対象とする教育・研究の実践性

を表現する名称となっています。それ

です。こうした一連の改革が確かな成果を生みだし、併せて教育学部の時代を

超えた発展的な拡大・再生産の基盤強化に寄与するよう、その推進にあたる

同窓生の皆様からのご支援とご鞭撻を引き続き賜りますようお願い申し上げます。

(「教育学部五〇年の歩み」より転載)

し、その周辺に学際的な分野や新しい分野が配され、さらに講座間の連携・

交流が図られることにより、これまでにない新たな創造的な領域での教育・

研究が進められていきます。

また大学院教育学研究科は総合教育科学の一専攻から成り、博士課程前期二年・後期三年の課程が設けられています。教育の研究者とともに、専修免許状を有する教員や、臨床心理士、生涯学習関連行政職員など、高度な専門的職業人の養成が行われています。

し、多様な視点から幅広く捉えなければ全体を見渡すことのできないものとなっております。

現在、社会が本学部の卒業生に求めている資質は、たんなる教育に関する専門知識でなく、個別の知識を有機的に関連させる柔軟な知識の運用能力です。

「教育」を教育・研究の対象として共有し、その共通の対象に対して人文学から社会科学、医学まで含むさまざまなアプローチを用いて能力を身に付けていくところに、本学部の独自性があります。

したがって本学部では、学校教員の育成を主目標にしています。

もちろん、必要な単位を修得することにより、中学校・高等学校等の教員免許状を修得することができます。

(2) 教育学部の沿革と新しい組織

① 教育学部の沿革

旧制 東北帝国大学法文学部哲学科

教育学講座

宮城師範学校、宮城青年師範

学校

昭和24年5月 東北大学教育学部設置

(教育学科、学校教育学科、特殊教育学科、二年制教員養成課程)

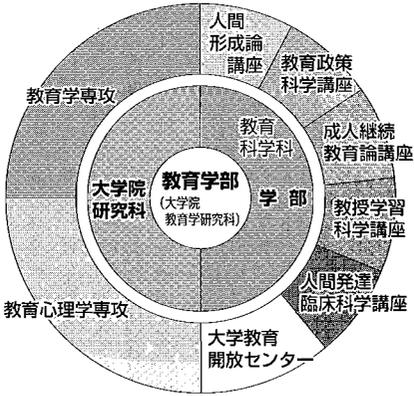
28年4月 大学院教育学研究科設置

29年9月 (講座省令公布) 教育学部

一〇講座

39年4月 教育学部 二学科三課程

(教育学科、教育心理学科、小学校教員養成課程、中学校教員養成課程、盲学



② 新しい教育学部組織図

校教員養成課程：三課程は教育学部分校で教育を行う。

40年4月 三課程廃止→宮城教育大学視覚欠陥学講座(現視覚障害学)

43年4月 知能欠陥学講座(現知能障害学)

48年4月 附属大学教育開放センター設置

平成4年4月 臨床心理学講座設置

5年4月 教育思潮講座

10年4月 スポーツ科学講座設置

- 教育学部 一学科五大講座
- 教育学科
- 人間形成論講座
- 教育政策科学講座
- 成人継続教育論講座
- 教授学習科学講座
- 人間発達臨床科学講座
- 教授学習科学講座
- 成人継続教育論講座
- 人間発達臨床科学講座

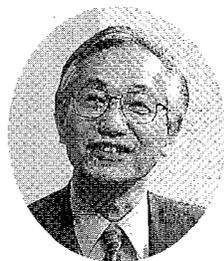
第六回総会・懇親会報告

菅井邦明教育学部長・同窓会長を迎えて

平成十二(二〇〇〇)年十一月二十四日(金)午後六時から東京、神田・学士会館において開催されました。本来、会期は二年毎ですが、平成十一年十月三十日に教育学部創立五十周年記念大会が仙台で挙行、これに出席の向きもあると考え、一年間総会を繰り延べた次第です。ご諒承の程を。

第一部の総会は議長団に川島春夫、小玉幸彦両会員を選任、人事・予算などの付議事項の全てが無事に承認されました。

第二部では菅井邦明学部長にお願いして、教育学部の歴史的転換ともいべき、改組の実情とその理念、展望について講話をいただきました。大学改革の時流のなかで母校の情報をとの希望が多く寄せられていました(今後、学ぶかも知れない児孫のために美田を残してほしいとの親心もこめて：西郷南州に叱られそうですが、菅井先生のご専門はコミュニケーション障害学、発達障害学等ですが、この分野は医療、看護、健康、福祉の今日的課題に隣接し、理論研究はもとより教育、臨床の実践活動にも忙殺されるとの由、窮屈な時間を割いてのご出席でした。



今回の総会は残念ながら出席者は僅か二十三名でしたので、第二部の意味と内容を本誌に特集の考以供する紙面構成にしました。資料等の抄録転載に関しては、菅井先生の前任学部長不破和彦教授の快諾を頂戴しました。記して謝意を表したいと存じます。因みに不破教授はわれわれの教育学部卒業(昭和四〇年)の初めての学部長、次の菅井教授も同じく卒業生(昭和四一年)です。同期あるいは同専攻の縁で懇意にしている方も少なくないと思います。

第三部は恒例の懇親パーティー。新任の佐藤全副会長、中川典雄事務局長の司会のもと、菅井先生を囲み母校の今昔や自身の動静、知友の消息を語る秋の夜啼に似た清々しい趣きの集いになりました。(河田・徳田記)

▼家根敏明氏への要請文（要約）

東北大学教育学部関東地区同窓会長
東北大学教育学部同窓会東京支部長
家根 敏明 殿

平成14年 5月13日

東北大学教育学部同窓会長
東北大学大学院教育学研究科長
菊池 武剋

大学は目下大きな変革の中にありますが、教育学部にも変化がありました。4月末に、新築の文科系総合研究棟に移転いたしました。また、大学教育開放センターが新設の大学院教育情報学研究部の一分野として分離されることになりました。さらに、臨床心理コースが認められ、臨床心理士の養成に向かうことになりました。今後は法人化を迎えて、同窓会の重要性が高まることと存じます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

さて、先日、東北大学百周年記念事業準備委員会から、百周年記念事業推進実行委員の推薦方の依頼がございました。早速、4月13日に同窓会理事会を開いて、ご推薦をお願いいたしました。教育学部は、26名の委員を推薦することとなっております。いろいろ検討いたしました。仙台支部から20名、東京支部から5名、北海道から1名をお願いすることといたしました。現職教官は別の委員となり実行委員は卒業生からということですので、どうしても同窓会の方々からお願いすることになります。このことにつきましてすでに江川先生にお知らせとお願いを差し上げておりましたので、ご存じとは思いますが、改めましてここにお願い申し上げます。

事情をご賢察くださいませ、東京支部から5名の実行委員を推薦いただきたく、お願い申し上げます。急なことでまことに恐縮でございますが、できるだけお早めに、お知らせくださいますようお願い申し上げます。

東北大学百周年記念事業準備委員会へ、
関東地区同窓会より五委員推薦

東北大学は二〇〇七年に百周年を迎えることとなり、東北大学教育学部同窓会長菊池武剋氏より委員の推薦依頼

があり、五委員を関東地区として推薦しました。

* * *

◆東北大学百周年記念事業推進実行委員会委員

- 家根 敏明 (教社 32)
 - 河田 喬夫 (教社 34)
 - 佐藤 全 (教行 38)
 - 岩坪 奇子 (教心 38)
 - 中川 典雄 (教社 41)
- ※()内の数字は卒業年を示す。

東北大学教育学部関東地区同窓会会則の一部改正について (平成12年11月24日)

会則

第2条 本会は会員相互の親睦と連絡をはかり、あわせて東北大学教育学部の発展に資することを目的とする。(現行) を下記の通り改正しました。

第2条に新たに、第2項を起し次の文言を加える事に改正。

「第2条第2項 本会は東北大学教育学部同窓会会則第4条2項により、東北大学教育学部同窓会関東支部としての役割を担うものとする。」

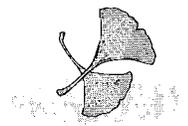
①改正の趣旨

東北大学教育学部同窓会の組織一新に伴い、北海道地区、仙台地区(本部)、関東地区の支部を設けることになり、関東地区同窓会をその支部とする。

②参考 東北大学教育学部同窓会会則

第4条 本会の事務局を東北大学教育学研究科内に置く。

2 会員が必要と認めたときは、支部を設けることができる。



百周年記念事業推進実行委員会について

(1) 百周年記念事業推進実行委員会の形態

財団法人東北大学研究教育振興財団(以下「財団」という。)に百周年記念事業推進実行委員会(以下「推進実行委員会」という。)を置く。

(2) 「推進実行委員会」の目的と任務

(1) 「推進実行委員会」は、東北大学が創立百周年を記念して行う次に掲げる百周年事業(以下「四大事業」という。)に要する資金を募集し、四大事業の推進を図ることを目的とする。

- ① 東北大学基金の設立
- ② 記念建造物の建設
- ③ 百年史の刊行
- ④ 記念行事の実施

(2) 「推進実行委員会」は、百周年記念事業の達成のため、個人・企業等に支援・協力についての理解と広報を行う。

(3) 「推進実行委員会」の組織と構成

(1) 「推進実行委員会」は、企業及び自治体等関係者、地域及び産業界等関係者、部局同窓会(含…支部同窓会)及び財団関係者等を母体として、広く組織することとし、

「推進実行委員会」に、以下の役員を置くこととする。

- ① 実行委員長(役員) …… 一名
- ② 同 副委員長(役員) …… 二十名
- ③ 同 常任実行委員(役員) …… 二十名
…… 二十名
…… 三十名程度
- ④ 推進実行委員総数 …… 五〇〇名〜六〇〇名程度

(2) 「推進実行委員会」の委員は、原則として各部局及び部局同窓会からの推薦によるものとする。

なお、この他、財団、全学同窓会、支部同窓会、退官教職員等、関係団体から適任者を推薦願うこととする。

(3) 「推進実行委員会」に委員長、及び副委員長を置くと共に、同実行委員会の下に募金活動を策定し、募金事業を推進するため常任実行委員会を置く。

(4) 部会等の設置

募金活動を円滑に行うため、「推進実行委員会」の下に以下の部会を設置する。

- ① 法人担当部会
- ② 同窓生担当部会
- ③ 教職員担当部会
- ④ その他(在校生等担当部会)

なお、①法人担当部会には、各地区における募金活動(法人のみならず一般市民をも対象とする。)を推進するための地区実行委員会を置く。

(4) 庶務

「推進実行委員会」及び「部会」に関する事務は財団の事務局において処理する。

(5) 「推進実行委員会」委員(役員)の選考等について

各部局及び同窓会等から推薦いただいた委員(役員)候補者については、財団の理事会において決定し、委員(役員)は財団の理事長が委嘱する。

同窓会関連の

役員の異動

(1) 東北大学教育学部同窓会役員として、次の三名を関東地区委員として推薦しました。

教育学部同窓会

副会長 家根敏明(越河六郎)

前会長と交替)

理事 江川 亮(再任)

理事 河田喬夫(再任)

東北大学全学同窓会東京支部

幹事 江川 亮(再任)

第7期東北大学教育学部関東地区同窓会総会のご案内

- ①開催日 平成14年11月8日(金)
- ②会場 ホテルエドモント 2F「波光の間」(千代田区飯田橋3-10-8 TEL 03(3237)1111
JR中央線飯田橋駅・地下鉄飯田橋駅下車徒歩5分 案内図を添付。)
- ③総会 18時30分(18時受付開始)
- ④講演 18時50分 …… 仙台市長 藤井 黎氏(昭和32年東北大学大学院教育学研究科修了)
- ⑤懇親会 19時30分
- ⑥会費 8,000円(当日受付にてお支払い下さい)
- ⑦申込締切 10月21日(月) (同封の返信用ハガキで、出欠をご回答下さい)
- ⑧問い合わせ先 同窓会事務局 中川典雄
自宅:〒331-0043 さいたま市大成町1-558 モンシェール大成206 TEL 048(667)7998
勤務先:朝日火災海上保険(株) TEL 03(3256)6068 FAX 03(3254)5978

きょうかん 第6期 (平成12年7月~平成14年10月) **維持会費協力のみなさま**
納入ありがとうございました。(167名。敬称略・卒業年度順)

編
集
後
記

●今年の夏はとにかく暑かった。地球温暖化と言われている中、小者もそうかなと思いますが、諸兄姉は如何ですか。日本の官、学、産業界を始め、各分野で活躍する諸兄姉にあつてはこの暑さをものともせず、その資力を果たされておるかと思存します。

●おりしも、我が母校、東北大学も創立百周年を迎えるに当たり諸事業の計画を策定中の様ですが、我が教育学部においても創設五十年を経て将来展望を踏まえ、諸施策を展開中と聞き及んでいます。

詳しくは、本稿中にも紹介させて頂きましたので、ご高覧願えれば幸いです。

●この様な時期、同窓会会報「きょうかん」6号を発行する事になり、盛り沢山のコンテンツながら、第七回総会のお知らせをトップページに持ってきました。これは関係者一同、一人でも多くの諸兄姉が総会へ参加されん事を願う気持ちからです。家根会長の提案する交流チャンスを創出する「場」の一つと位置づけたいと考えました。

●編集関係者の一人として、非力ながら、まだまだやりたい事が多く、時間が無いままに、引き受けたせいもあつて、前例を踏襲した面、ひらにご容赦下さい。改革は一つ一つ、石を積み上げることでしょうか。

(長谷川 嵩)